

「日本は平和ですか？」を考える

(一社) 基礎構造研究会代表理事 杉村義広

今回は、名古屋講習会での三つ目として、とくに建築基礎とは関係がある訳ではないが、言葉の重要さという点では通じるものがあるために記述しておきたいことに出会ったことに触れておきたい。講習会を終えて帰宅後に 6 月 26 日毎日新聞朝刊で「見上げてごらん (永山悦子)」というコラムを読んだ。タイトルは「日本は平和ですか？」であり、批准してから 25 年になるのに合わせ NPO などが催した「広げよう！子どもの権利条約」キャンペーンで発言した東京都内の中学 1 年生、坂口くり果さんの内容を取り上げたものである。その部分だけ抜き出すと、以下のようである。

「70 年以上戦争をしていないから平和だと思っているかもしれませんが。しかし、平和とは戦争がないということだけでなく、私たち一人一人が幸せを感じて生きていることなのだ、私は考えます」

「子どもが虐待で亡くなるニュースが日本中を悲しみで包みました。学校の先生が暴力や暴言で子どもを傷つけるニュースも耳にします。いじめで苦しんでいる子どももたくさんいます。だから日本は平和ではないと思うのです」

この最後の「日本は平和ではない」の言葉が胸に突き刺さったとコラムは書いているが、筆者も通り一遍の生活の仕方をして来たことを鋭く指摘されたような衝撃を受けたのである。70 年以上戦争をして来なかっただけで平和と言えるのか、いじめや虐待で苦しみ、自死〔自殺〕という言葉は使いたくない〕してしまう子供も報道される今日の社会は本当に平和と言えるのだろうか。コラムは“国内の 10～14 歳の死因の 1 位は自殺だ。子どもにかかわるつらいニュースを聞いたたびに、「日本は平和なのだろうか」と考えさせられる。”とも書いている。育ち盛りの世代の死因が「自死」であると聴くことも衝撃の至りで、断腸の思いを感じざるを得ない。

翻って杭基礎の問題を考えれば、例えば、杭径の 10%沈下時の荷重を極限支持力と定義するという考え方〔2001 年版建築基礎構造設計指針から始まっている〕について筆者は、“打込み杭の場合は妥当であり、国際的にもコンセンサスが取れているが、場所打ちコンクリート杭や埋込み杭のような掘削を伴う杭の場合は、杭径の 10%沈下時は極限状態とは全く違う中途段階の現象であるので単なる「基準の支持力」であって、「極限支持力」の用語を当てるのは適切でない〔学術的にはむしろ間違いである〕”と言い続けている。この点は、以上の「平和」問題とは次元を異にするとはいえ、言葉の意味を深く考えずに使ってしまうことの罪の深さに関しては類似点、というより共通点があるのは明白ではないかと思われる。自省も含めて、この点を胸に深く刻銘するためにここに記述することにした。